

国際交流を楽しみ、英語を用いて自分らしく表現できる子ども

ーコミュニケーション力の育成ー

小 学 校 坂本 定生、藤野由起子、今永 晴香
川口ローラ

研究協力者 池野 修、立松 大祐(愛媛大学)

1 主題設定の理由

近年の急速な国際化は、異文化や多言語を持つ人々との共存の必要性を高めている。日本においても、2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催に向けた準備が行われており、海外からの観光客や日本国内で働く外国の人に出会う機会が増加している。世界の人々と交流し、異文化に対する理解を深めることは、東京オリンピック・パラリンピックの成功だけにとどまらず、国際社会の中で、次世代を担う日本の若者が、海外の人々と心を通わせ、望ましい関係を築いていくためにますます重要になるであろう。

小学校の発達段階においては、外国の人と望ましい関係を築いていくために大切なことは、外国の文化等に対する知識・理解に加えて、外国の人と進んでコミュニケーションしようとする態度の育成や、相手を尊重したり、外国の人に対する苦手意識や心のバリアを作らないようにしたりすることが重要であると考えている。

しかしながら、子どもたちを取り巻く環境は、学習塾や習い事に通うことで多忙化し、友達との遊びを通じたコミュニケーションの場の減少や、少子化や核家族化によるコミュニケーション不足などが懸念されている。

そのため、くすのき学習【国際】では、外国の人との交流学習の機会を保障し、外国語(英語)をコミュニケーションの手段に用いながら、外国の友達に絵手紙を書いたり、外国の人に来校してもらったり、インターネットを利用して外国に住む同年代の子どもと話したりする交流学習を行うことで、コミュニケーションの場を多く体験することを大切にしたいと考えた。

また、外国語活動においては、外国との交流学習を活動に加えながら、英語に慣れ親しむ学習を行い、英語によるコミュニケーションを大切にしたい学習を行うことで、子どもたちに豊かなコミュニケーションを行うことのできる資質・能力を養いたいと考えた。

そこで、「国際交流を楽しみ、英語を用いて自分らしく表現できる子ども」を主題とし、コミュニケーション力を育成することが、これからの国際社会を生きていく子どもにとって大切であると考え、本研究主題を設定した。

2 〈自己効力感〉が高まるくすのき学習【国際】の授業づくり

(1) くすのき学習【国際】における〈自己効力感〉が高まっている姿

くすのき学習【国際】は、外国語活動と外国語科を総合的な学習の時間及び特別活動と合わせて合科的に扱っている。そのため、「話すこと」「聞くこと」においては、言語や文化についての体験的理解、積極的なコミュニケーション態度の育成、外国語の音声や基本的表現への慣れ親しみ、コミュニケーション能力の素地を養うこと等がねらいとして求められる。その上で、異文化を持つ人との出会いを大切にしながら、コミュニケーション力を育成することが非常に大切であると考えている。そこで、くすのき学習【国際】で育てたい資質・能力を、①外国語(英語)の音声や基本的表現への慣れ親しみ、②積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度と考え、教科等の枠を超えて汎用的に働く資質・能力を「コミュニケーション力」と捉えている。

子どもたちは、異文化を持つ人との出会いに期待感を持ち、心を動かしながら意欲的に学習し、交流の準備過程で友達と協力したり、交流相手を通じて日本や自分について再発見したり

する。そして、単なる新しい知識や英語表現の習得だけではなく、外国に住む人や、外国から日本に来た人と、英語を用いながら交流学習を楽しみ、そこで育まれたコミュニケーション力を自分の生活や次の交流学習、新しい他者との出会い等に生かそうとする子どもを、〈自己効力感〉の高まっている姿として以下のように考えた。

- 外国語（英語）の表現や、異文化を持つ人との出会いを楽しもうとする子ども
- 集団としての学びを大切にしながら、異文化を持つ人々とつながり、交流で得られた再発見を楽しもうとする子ども
- 外国語（英語）をコミュニケーション手段の一つとして交流を楽しみ、そこで育まれたコミュニケーション力を、生活や他教科等の学習にも生かそうとする子ども

そこで、くすのき学習【国際】においては外国語活動及び外国語科の学習を生かす場としての交流学習を設定し、実践を行うことを計画した。交流学習に向けて、コミュニケーションの手段としての外国語（英語）を扱う必然性が高く、共同学習者との学びの機会も多いだけでなく、子どもの学びの場の広がり期待できると考えた。

その上、くすのき学習【国際】に交流学習を位置付けることで、高学年の外国語科及び、中学年の外国語活動の効果的な実践が可能になるのではないかと考えた。そこで、交流学習の一つのゴールとして位置付け、各単元を教科等横断も考慮しながら再構成を試みる。交流学習のために必要な英語表現やコミュニケーションの方法を逆算しながら、交流学習に向けて必要な準備や練習のための時間をくすのき学習【国際】として確保すれば、子どもたちの活動の広がりや深まりを担保することができると考えた。

本校では、過年度の授業実践において、フィリピンやオーストラリア、アメリカ合衆国（ハワイ州）などと交流学習を盛んに行ってきた。その実績や成果を生かした単元構成及び授業実践を行いつつ、交流の後には子ども対象のアンケートを実施し、子どもの見取りに生かすだけでなく、授業の在り方の評価材料にする。さらに、交流学習の活動内容を見直ししながら、長期的に継続可能かどうか、子どもに〈自己効力感〉の高まりが見られるかといった視点から、交流学習を生かした、くすのき学習【国際】の有効性について探る。

(2) 〈自己効力感〉が高まる指導と評価

ア 「出会い」の場面

オーストラリアやフィリピンなど、外国の人との交流を設定し、交流に向けての見通しを持つ場面である。外国の人と交流したいという欲求を満たす場を設定し、英語を用いたコミュニケーション力を高めることで、〈自己効力感〉の高まりが期待できる。異文化を持つ人との新たな出会いの予感が、子どもの「自分のことを伝えたい」「交流が楽しみだ」といった意識を顕在化させる。交流に対する期待感、子どもの心の動きであり、英語を使った表現を意欲的に学んだり、楽しんだりしようとする活動が期待される。授業後の振り返りでは、発言やワークシートへの記入内容によって子どもの心の動きを評価する。

イ 「追究」の場面

学級やグループなどの集団としての学びを大切にしながら、「外国の人と交流する」という目的に向かって活動する場面である。学級集団として交流学習を成功させるためには、自分が伝えたいことを英語で話すだけでなく、友達と協力して手際よく発表する練習をしたり、交流に必要な準備を行ったりする。「追究」の場面においては、同じ学級の仲間や交流相手と活動や交流を通じてつながることで、必然的にコミュニケーションの場ができる。「友達と交流したい」「誰かの役に立ちたい」という欲求の充足と、英語を用いたコミュニケーション力の高まりが、〈自己効力感〉の高まりとなって表出する。ここでは、交流のための英語を用いたコミュニケーションの様子を見取ったり、パ

パフォーマンス評価の在り方を探ったりする。さらに、学習の後には、振り返りを行い、異文化を持つ人や文化、他者と自分自身に関する気づきや再発見等を評価しながら、〈自己効力感〉の高まりを見取る。

ウ 「振り返り」の場面

「振り返り」の場面では、交流を終えての子どもの感想や、交流までの過程について振り返りを行う。子どもの発表や記述の中から、「英語を用いたコミュニケーションがどの程度できたか」「交流学习が楽しめたか」などについて見取り、コミュニケーション力の育ちと、〈自己効力感〉の高まりを評価する。併せて、次の交流活動を計画することで子どもの期待感や次の課題に対する自信などから、一つの単元を終えた時点での子どもの〈自己効力感〉の高まりを見取ることが可能であると考えている。

(3) 教科等横断的な単元の構想

くすのき学習【国際】は、新学習指導要領の先行実施として高学年の外国語活動70時間及び中学年の外国語活動35時間を含んでいる。そのため、くすのき学習【国際】は、新学習指導要領の目標や内容を包括しており、「We can」や「Let's try」などのテキストを効果的に用いながら、留学生や外国から来た人、外国に住む同年代の小学生などの交流学习を位置付けている。

そのため、外国語活動や外国語科の内容をテキストに沿って順番に学ぶのではなく、交流学习で使える内容を効果的に配置し、交流する相手と学ぶべき内容を明確に持つことで学習の意欲化を図る。また、交流相手の国の文化や自然について調べたり、体験的に英語を学んだりする活動を実践しながら学習を進めていくのが特徴である。

すなわち、くすのき学習【国際】は教科等横断的な単元そのものであり、外国語科や外国語活動で学んだ英語表現や、身に付けたコミュニケーション力を主に発揮する場が交流学习である。

例えば、オーストラリアの友達に英語で手紙を書くために、音声で十分に慣れ親しんだ自己紹介の英語表現を、例文を参考して書いてみる。さらに、オーストラリアの小学生と

インターネットを用いて交流するために、既に学んだ自己紹介や自分の好きなこと、伝えたいこと等の英語表現を練習し、実際に英語を使って交流することでコミュニケーション力が高まり、英語学習に意欲的に取り組めるのではないかと考えている。

以上のような考えに基づき、くすのき学習【国際】では、交流学习を明確に位置付けながら、各教科や領域と横断的に単元を構成することで、より効果的な学習の単元モデルを示し、新たな学びを追究していきたいと考える。

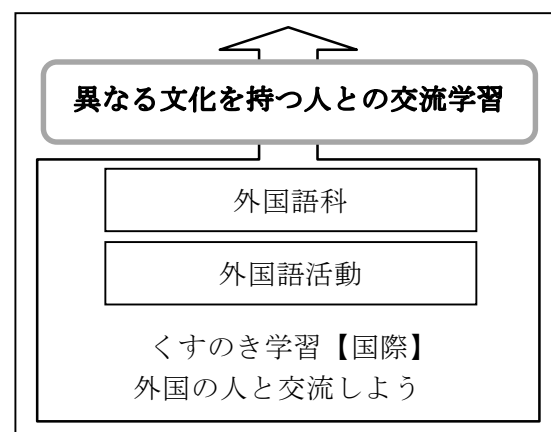


図1 交流学习を生かした単元構想モデル

(坂本 定生)